

# 日持上人の遺跡を訪ねて

望 月 是 順

我が、海外布教の先驅者たる、日持上人が、一天四海皆歸妙法てふ、聖祖の理想貫徹を期し、不惜身命の覺悟を持つて、言語も通ぜざる夷地を指して、永仁三年正月元旦（四十六才）孤影漂然として、故郷駿州庵原郡松野邑を發足し、北海の荒海を超へ、北海道より、樺太を経て、滿州の地に渡り給ふてより、既に六百四十餘年の星霜を重ね、現在北海道の地には至る所其の靈跡を存するも、我が樺太には遺跡として傳ふる所、纔に西海岸に一ヶ所を止むるのみ、それも人口に喧傳せらるゝに至りしは極めて最近の事である。幸にして、今夏八月下旬、樺太日蓮宗布教師大會に列し、同志十餘名と共に、此所に參拜する事を得しは實に幸と思ふ者である。

樺太東西兩沿岸を縦貫せる二大鐵道中、東豊原、西眞岡の間に横斷線あり。西海岸線は本斗ほんとを起點として、目下終點野田迄開通し、眞岡より八ツ目の驛、本斗より三ツ目おこが阿幸あさちにして、持尊の靈跡は

此處に在り、眞岡より一時間半にして達する事が出来る。樺太の沿岸は出入少く、従つて良港に乏しい。阿幸の邊、海と山と接近し、纔に谷川の傍に寒村ありて、漁業に従事してゐる。驛を中にして、部落へ四丁、御靈跡へ二丁餘ある。

惠まれし天氣を喜びつゝ、御遺跡を訪へば道路より數丈、山手寄りの高所に、木もて作られた階段あり。傍に二間に二間半の一堂あり、階段を上げば、正面に木柵を圍らし、中央に題目の寶塔と、二個の大石起立するもの、是れ日持上人の小舟に棹指して、何れを目當ても無く、今の北海道の地より、荒海を渡りて漂着せられた地である。一同讀經、祈念暫くして、眼下を見れば、北海の白波磯を洗ひ、數百年變り無く、寄せては返し、返しては復寄する様、日持上人が此の浪に搖られて此地に着かれし事かと思へば心無き波にも事問ひ度き親しみを覺へる。更に漂着せられし上人の苦辛や如何に、現在文明の世に布教する事さへ尙且つ難事なるより推して、六百餘年前の事が偲ばれ、知らず目頭の熱するを覺へ去り難くある事數刻、辞して阿幸の部落を訪問する。

部落は戸數約五十ばかり、而も宗門の人無く、眞宗の人に非ずんば禪宗の人であるが、皆熱心なる日持上人の鑽仰者であると聞くもなつかしい。三浦某氏の宅を問ふ、同氏は、靈跡保存に丹誠せられし人である。來意を告ぐれば、五十才位見るからに質朴な主人は、一行を迎へて快く、尋ぬるが儘に、

今日迄の苦心談や、奇蹟を物語つてくれた。

由來樺太は岸石に乏しく、現今秋の漬物石なども遠く北海道より輸入し、一貫目何程と買ふ有様、内地の如き至る所、遺跡靈跡等に巨大なる碑ありて往時を傳ふるも、此地其便無く、加之往昔未開野蕃の時代なれば筆紙の残すべき便りもなく、日持上人來島時の如き、如何にして其の足跡を後世に遺さんかに苦しまれしか想像に難く無い。現在遺跡に存する石の如き、此の附近に見るを得ざる大石なるも、其質弱く爲に上段より碎けて、二個並立するの現状を呈してゐる。従つて、石面を調ふるも、文字の見るべき無く、然も是を持尊の遺跡と傳ふるに至りしには、一つの奇談がある。之を三浦氏の言に聞く、部落民は大体北海道より移住せる者で、此の石に就ては先住者よりの口傳へとして傳へられし所ありしも、大正十年前後の頃、部落民全体に夢告あり、而も一夜ならず三晩も、「我は本化沙門蓮華阿闍梨日持なり。」と告げ、海水に浴しては讀經し、經石の所へ至り、或は夜中、高聲に法華經を讀誦する事數夜に及び、村民聲を尋ねて至るも姿無く、一同不思議に思ひ居たる所へ、眞岡法華寺某師來り、之を聞きて、日持上人の徳を讚し、法要を營む、村民亦深く感ずる所あり、一回發企して、千數百金を投じ、大正十五年現在の堂宇を建立せるものなりといふ。其の碑の近在得難き石なる故持ち行きて道標にせんずなんどの企てあり、數人して動かさんとするも能はずなんどこもいふ。石の周

園、最近雜草生ひず、七葉の笹生ひ茂り、遠近の者奇となし、持ち歸つて、藥となすに不思議に卓效ありともいふ。是は三浦氏の物語りであるが、此の地が上人の靈跡なる事は、種々な方面から考へて確實らしい。

昨今樺太廳に於いても、六百余年前、上人の來嶋せし事は、樺太開發上、非常に意義深き事なりとし、此の地に紀念碑建設の企てあるやに聞いてゐる。我等も全嶋布教師大會に於いて、約二万圓の豫算を持つて、上人の銅像建設を發企し、已に大半の資金を得、昭和六年の御遠忌迄に完成すべく目下努力中である。

日持上人に依つて、先づ題目の聲を印した我が樺太は、目下五箇所の寺院と、十三箇所の布教所を有し、更に將來の理想に向つて、法陣を張つてゐる。聽ては樺太全嶋に法鼓の音の響き渡る事であらう。

更に各地教會の狀勢等は次回に報ずる事となし、遠く懐しの身延の有様を胸に描きつゝ擱筆する。

(昭和四年十月十八日)